

C. アレクサンダー・のパタン・ランゲージで読み解く街づくり／ 尾道く坂の街>にみる都市のインテリア（その3）

○灰山彰好

Renovating skill in the housing slope area from a view of “Pattern Language”, C. Alexander

／ Studies of interior in the traditional town, Onomichi city (part 3)

○Akiyoshi HAIYAMA

はじめに

尾道く坂の街>地区の街づくりの特色は、個人の力が最大限に発揮されている点にあり、く都市のインテリア>とのテーマを掲げる理由もそこにあるが、観光客に広く支持されているとはいえ、あくまで主観的評価であって、計画術に加えるにはなおためらいがある。(その3)では、C. アレクザンダーのパタン・ランゲージ 253 項目上に尾道の街づくりを敷衍し、相対的な客観性を得ようとするものである。

研究の方法

30 年前、世界の建築学生、若手研究者に大きな影響力を与えたニューレフト建築学の書「パタン・ランゲージ」は、都市（公的空間）とインテリア（私的空間）の壁を取り除こうとしたとの意味で、実は都市のインテリアの書ではなかったかーとの仮定に基づいて、筆者は本年度刊行の論文報告集 21 号に、インテリアの視点（対象概念の内包 connotation を特に追及する視点と定義）から再構成した索引^①を発表した。この報告は、その索引を活用したケーススタディーである。

アレクザンダーはパタン・ランゲージ 253 項目を、対象の大きさ順に街、建物、施工の三章で括っているが、施工の章に記載されたパタン・ランゲージの多くは窓、扉などの建築ディテールである。索引では 253 項目を**地域、街、施設、空間、ディテール**の 5 語で再構成し、各パタン・ランゲージが伝えるメッセージを簡潔に付記しており、尾道などユニークな観察対象をサーベイし描き留める際に、ことばの引き出しとして利用できる。

分析／尾道く坂の街>のパタン・ランゲージ

地域 region／

1. 自立した地域

パタン・ランゲージ（以下 PL と略記）によれば、地域は「独自の文化を形成するほど小規模かつ自立的」なのがよいという。戦前の栄華を負の遺産として抱え、朽ちるにまかせていた尾道は、1980 年代に至って、尾道出身の大林宣彦監督の映画を通してレトロな街並みが楽しめ

る古都のイメージを獲得し、映画ロケの街、散策観光の街として復活した。

街 town／

8. モザイク状のサブカルチャー

1 3. サブカルチャーの境界

アレクザンダーはまた、誰もが認める一級品の文化遺産に対して、そこまでは至らない準一級文化・サブカルチャーの重要性を訴えているが、尾道は日本人にとって、まさに思い出のおもちゃ箱をひっくり返したようなサブカルチャー都市なのである。

1 1. 地区交通のエリア

PL の 11 番目では、地域が存続する条件として、「自動車交通を思いとどまる」（各パタン・ランゲージの内容の要約を、以下カッコ内に記す）必要性が指摘されている。尾道く坂の街>は、自動車交通が不可能ゆえに新築が許されず、やむなく残った。空き家再生プロジェクトには、市役所公認の都市再生術との期待が掛っている。

3 2. 買い物通り

旧山陽道のにぎわいを引き継ぐ本通り商店街は、PL でいう「前自動車時代の買い物通り」である。いわゆるシャッター街状況に陥る寸前で、U字回復した。

4 3. 大学は市場

大学はキャンパス内に留まるべきではなく、「街中に散らばった思想の広場」でなくてはならない、と PL はいう。最盛期の尾道には文人墨客を惹きつけ育てる気風があったが、今日もまた多くのアーティストが、街をキャンパスに見立てた活動を続けている。

5 6. 自転車路と置き場

1 1. 地区交通のエリアでは、自転車路の整備と置き場の充実が課題となる。尾道く坂の街>では、空き家が取り壊されてできた空き地は、接続する自動車道路が無いので、必然的に駐輪場となる。

6 6. 聖域／7 0. 墓地

く坂の街>は元々すべてが聖域であった高台が豪商、中流階級、そして庶民へと割譲されてできた街であって、先住死者に対する敬意が地域意識を結び付けている。

7 4. 動物たち

「ペットは楽しいが人間化し過ぎている」と、アレクサンダーは野生への憧憬を露わにしている。同じ文脈上にあるのであろうか、<坂の街>では飼い犬は不当に抑圧され、放し飼いの猫が法外な厚遇を受けている。

施設 facility／

3 7. 住宅クラスター

「公共地を共有する」、ふた昔前の長屋住まいに見られた住宅地計画が、<坂の街>では今なお有効である。

8 0. 自主管理の作業場・オフィス

「歯車の一つとなった人間は仕事を楽しめない」と感じた人達が尾道に集まり、NPOを組織して街づくり、空き家再生に取り組む。アレクサンダーが主張しつづけてきた市民参加型の街づくりが、本人の生活権を賭けて行われている。

8 7. 個人商店

チェーン店ではない「生活的に運営される店舗」が、尾道では今なお主流であり、チェーン店も市民、観光客の意を汲んでか、小規模である。

1 1 6. 重層する屋根

「建物は立体として、それも特に屋根の体系として」表現される。<坂の街>では、重層する屋根の映像効果は絶大である。

空間 space／

8 8. ストリートカフェ

アレクサンダーは「衆目の中で合法的に腰を降ろす場所」の重要性を、あらゆる機会に万言を費やして論じているが、尾道を歩けばすぐに納得できる。

1 0 0. 歩行者街路

<坂の街>の細街路は「屋内廊下の代わり」になりうる、公と私が微妙に混じり合う公道である。

1 1 2. 入ると別世界

1 1 5. 生き生きとした中庭

一部の前庭住宅を除くと、<坂の街>の大部分は通風採光を中庭に頼る和風住宅地である。閉鎖的な中庭を活かし続ける動機は少なく、うっかりするとすぐに「死んだ中庭」になるとアレクサンダーは言う。尾道では空き家再生グループが空き地再生にも取り組んでいる。

1 2 5. 階段に座る

<坂の街>はまた階段の街、しかしアレクサンダーの意に反して、尾道には「地べたりあん」が居ない。

1 6 0. 建物の外回り

2 4 2. 玄関前のベンチ

PLは「建物の周囲にはベンチ、歩廊、バルコニー、

草花・・・」「建物の外延の形成に役立つ」など、公共への私的サービスが欲しいと言っているが、幸い<坂の街>には、それらのすべてが備わっている。

1 7 3. 庭囲い

<坂の街>の等高線に沿った細街路の片方は石崖、そして残る片方には、「車の騒音」のためなどではなく、中庭を上から覗かれないための塀(庭囲い)が必要になる。高さは外から見ると人の背丈、しかし内部構造はとんでもない高さとなり、今その保全が課題となっている。

ディテール detail／

1 6 4. 表通りの窓

1 6 5. 通りに開く

2 3 6. 一杯に開く窓

アレクサンダーは通りに面した窓の作法について、これもまた万言を費やして議論している。要は通りから他人の部屋を無作法に覗き込むのではなく、また逆に薄めに開けた窓、格子の間から外を監視するのでもなく、目が合えば自然に会釈し一寸とほほ笑むほどの公と私の関係を、設計の工夫を通して築こうと言うのである。見知らぬ人であっても目が合えば会釈する作法は、今の日本人は得意でない。空き家再生に取り組む、独特の自己表現法が備わった新移民に期待すること大である。

1 9 2. 街を見下ろす窓

「眺望のない部屋は牢獄も同然」とは当然の道理であるが、<坂の街>では眺望はステイタスであった。

考察

クルマに依存できない尾道<坂の街>の、街づくりの内包 connotation を、25 項目についてピックアップして要点を論じた。公と私の間という見えにくい対象を同定できたとだけはいえよう。索引においてに関するパターン・ランゲージと判別された 164 編中の 25 編が多いか少ないかは、また別の照合事例を得た後の判断になるが、もしも本稿が何も参照しないモノグラフであったら唯の感想文となっていたわけであるから、パターン・ランゲージの、そして索引の有効性が証明されたといえるであろう。デザインサーベイの折に携帯する物差しの一つとして、索引を活用していただければ幸いである。

注記

(1) C. アレクサンダー「パターン・ランゲージ」に描かれた都市のインテリアー屋外環境を対象としたインテリアの記号論的分析ー

日本インテリア学会論文報告集 21 号, 2011 年 3 月
(建築工房 studio HAIYAMA)